歴史館だより

- 最上家親を見直す― 花押に注目して ―
- 「時は今 天が下しる 五月哉」について雑感
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.10
- 最上義光連歌の世界④
- 研究余滴⑲「石鳥居」のこと

No.27
2020年3月発行
最上義光歴史館

最上家親を見直す
―花押に注目して―

松尾剛次

山形藩第二代藩主最上家親（一五八二―一六一七）に関しては、治世期間が三年と短いこともあって、その謎の死ばかりが注目されてきた。しかしながら、家親の人生を史料に即して見てみると、義光の跡を引き継ぐだけの器量を有していたことがわかってきた。ここでは、家親の花押（サイン）に注目しながら、家親の実像に迫ろう。花押は、同じものをずっと使うというよりも、その人物の立場の変化などと連動して変える場合も多く、家親の立場の変化を花押の変化から追うことができるからだ。

家親は、天正十九（一五九一）年、大森（福島市）で九戸討伐に来た徳川家康に拝謁を遂げ、それ以後は家康の近習となった。慶長元（一五九六）年からは、秀忠の近習となって江戸で暮らしたが、慶長十九（一六一四）年二月には第二代山形藩主となる。もっとも、花押は、成人してから使えるので、花押に注目すると、文禄三（一五九四）年八月五日、十三歳で家親が徳川家康の前で元服式を行なって以後が対象となる。

家親花押の研究といえば、武田喜八郎氏（『武田喜八郎著作集　巻一　山形県文化史の諸研究』（小松印刷所、二〇〇七）によって、明朝体の図（2）と図（4）の二つの花押が知られている。明朝体とは、江戸時代に流行した花押型で、徳川判ともいい、「中国の明の太祖が始めたところとも。名乗りの字を使わないで、上下に一画を置いて中間にいろいろな形を作る」（『日本国語大辞典』12、一九七二）。武田氏は、図（2）は慶長初年頃から、図（4）は慶長十五・六年から元和三（一六一七）年まで見られるとする。

もっとも、武田氏は『山形市史史料編1　最上氏関係史料』（山形市、一九七三、『市史史料編1』）では、文禄四（一五九五）年八月十三日付最上義康・家親連署状（『市史史料編1』一八二頁）の家親花押も挙げておられるが、『武田喜八郎著作集』では挙げられていない。理由は書いておられないが、最上義康・家親連署状を後世の写しとされたからであろう。私見も、そうした内容の文書が出されたとは考えるが、写しと考え、この花押分析では除いている。そうした武田説は大いに示唆にとみ、基礎的な研究と評価できるが、以下に見直してみる。

家親文書については、黒田富善氏「最上氏時代の寒河江領主について」（竹井英文編著『シリーズ戦国大名の研究6最上義光』戎光祥出版、二〇一七）や鈴木勲氏「最上（寒河江）家親文書に関する一考察」（初出は『西村山の歴史と文化』Ⅳ、二〇〇二、後、竹井編『最上義光』採録）の研究があるが、花押の分析などはなされていない。

管見に及んだ家親発給文書としては、慶長七（一六〇二）年四月二日付の菅井掃部左右衛門義満宛最上家親宛行状が初見である（黒田「最上氏時代の寒河江領主について」九二四頁の表10―1「最上家親発給文書一覧」参照）。

今度、当村在方扱に依って申出し候事者
右件の赤田千苅は、永代未来に、出し置き候ところは実正である、もし猶自今以後違乱の儀これあらば、彼状をもって糺明を致すべき者なり、仍って件のごとし
慶長七年
寅卯月二日　家親（花押）

図（1）Ⅰ型

図（2）Ⅱ型

図（3）Ⅲ型A

図（4）Ⅲ型B

図（5）
慶長五年七月七日付
村上義明宛徳川秀忠
書状に見える花押

菅井掃部左右衛門とのへ

〈菅井文書、阿部酉喜夫氏所蔵写真〉

内容は、家親が、赤田（寒河江市）千刈の土地を菅井掃部左右衛門義満に宛行なっている。宛名人の菅井氏は、溝延八幡宮（山形県西村山郡河北町）の神官で、菅井義満は寛永元（一六二四）年七月二十九日に死去している（『寒河江市史　大江氏ならびに関係史料』、二〇〇一、一六八頁など）。

本史料から、家親が慶長七（一六〇二）年四月二日には寒河江領主であったことは確実である（『寒河江市史上巻』（寒河江市、一九九四、九二四頁）。ただし、本史料は、寒河江領主としての家親の活動を示すのみならず、家親の花押研究においてもきわめて重要である。

本文書に書かれた花押は、従来、全く注目されてこなかったが、図(1)のようなもので、これまで知られている図(2)や図(4)の花押とは異なっている。それゆえ、図(1)の花押を花押Ⅰ、図(2)の花押を花押Ⅱ、図(3)・図(4)の花押を花押Ⅲ（AとB）と区別する。

それらの三類型の花押は、基本的に図（5）のような、慶長五（一六〇〇）年七月七日付村上義明宛徳川秀忠書状に見える徳川秀忠花押（藤井譲治『近世史小論集』思文閣出版、二〇一二、一六三頁）と似ている。家親は、主人の秀忠の花押に似せた花押を使っていたのである。

ところで、翌年慶長八（一六〇三）年二月晦日付宛名不詳最上家親知行宛行状（白田佐著『新病院の落成を記念し「白田病院の歴史」を考える』白田病院、一九八二、一五頁）では、家親の花押は図（2）のようなⅡ型花押に変化している。すなわち、慶長七年四月二日から慶長八年二月晦日までの間に花押が変わったと考えられる。その花押変化の背景は明確ではないが、慶長七年七月以降に義康が没落し、家親が家督継承者となったことによるのではと考えている（この点は別稿『最上三代』ミネルバ書房刊行予定で述べる）。なお、慶長八年二月晦日付文書も先の慶長七年四月二日付の文書も、いずれも原史料は所在不明であり、『山形県史』などで紹介されてこなかった文書である。

ところが、慶長十五（一六一〇）年になると、図（3）のような花押ⅢAになり、以後、花押Ⅲ型を使い続ける。管見に及んだ花押ⅢAの書かれた初見文書は、以下の慶長十五（一六一〇）年九月十二日付島津家久宛最上家親書状である。

（端裏捻封上書）

「　嶋津陸奥守様　　山形駿河守

人々御中　　家親　」

以上

先刻者、於御城卒度得御意、御残多存候、然者琉球王御奏者申候条、今晩御門へ御礼申度候間、御内儀被仰入可被下候、何様以参可得御意候、恐惶謹言

（慶長十五年）

九月十二日　　家親（花押）

（島津文書、『市史史料編1』二九一頁、東大史料編纂所架蔵マイクロフィルムにより訂正）

島津家久は、慶長十五年八月に琉球王尚寧を率いて江戸城に徳川秀忠に拝謁した（『大日本史料』12の7、六三八頁）。前年慶長十四（一六〇九）年に、琉球王国は嶋津領となったので、島津家久は、その挨拶のために江戸へ参った。家親は、その際、琉球王尚寧を秀忠に取り次ぐ奏者の役を命じられた。本文書の伝えるように、家親は、無事に奏者の役を果たし、そのお礼の挨拶をしたい旨を島津家久に伝えている。

本文書には、図（3）の花押ⅢA型が書かれている。図（4）のような花押Ⅲ型といえるが、右に少し傾いているという相違がある。

家親はなぜ、Ⅱ型からⅢ型へ変えたのであろうか。家親は、この尚寧以後も摂家クラスが秀忠との対面に際しては、奏者（取り次ぎ役）を勤めるように命じられた（『徳川実紀』慶長十五年八月二十八日条）。いわば、家親は秀忠の近習から幕閣の一員となったのである。

とすれば、Ⅱ型からⅢ型への花押変化は、家親が奏者（秀忠のスポークマン）となるなど、幕閣の一員として江戸で活躍するようになったことによると考えられる。そうした立場の変化に応じて、花押を変えたのであろう。

ところが、慶長十六（一六一一）年正月十一日付け城志摩宛て最上家親一字状（『山形県史資料編上』三七八頁）では図(4)のような、傾きのとれた花押となる。また、その花押は、最大縦幅四・〇cm、同横幅横七・〇cmと大きい花押である。山形藩主継承（予定）者としていわば自信に満ちた花押となってゆく。

以上、（1）家親の花押は花押Ⅰ～Ⅲの三種類があったこと、（2）花押Ⅰは慶長七年四月二日には使用されたこと、（3）花押Ⅱは慶長八年から十五年まで、花押Ⅲは慶長十五年九月十二日には見られ死去するまで使われたこと、（4）花押Ⅰは寒河江領主として、花押Ⅱは義光の家督継承者として、花押ⅢAは幕府の幕閣の一員、花押ⅢBは山形藩主（予定者）としての家親を象徴すること、などを述べた。

本稿作成に際し、北畠教爾氏、鈴木勲氏のご教示を得た。

（山形大学名誉教授）

「時は今 天が下しる 五月哉」について雑感

名子 喜久雄

連歌の冒頭の句を発句と言う。その詠み様に作法があったことは、周知のことである。ただし、十五世紀後半より、発句を独立させて鑑賞する風潮が現れる。今日の俳句につながることは、言うまでもない。

さて、戦国の武人たちは連歌をたしなみ、風流を心がけていたことは、常識化しつつあるが、それらの人々の発句の中で、著名なものの一つに、明智光秀のそれがある。

以下にそれを示す。（論述の都合上、第三の紹巴句まで示す。本文は「連歌集」新潮日本古典集成昭和五十四年　島津忠夫氏校注に依る。）

賦何人連歌　天正十年五月廿四日

1　ときは今天が下しる五月哉　　光秀
2　水上まさる庭の池水　　行祐
3　花落つる池の流れをせきとめて　　紹巴

島津氏は光秀句の解釈を、こうとらえている。

時は今、土岐の一族である自分が天下を治めるべき季節の五月となった。

信長を討つ決意を秘めたとする解釈は、人々に疑われることもなかった。（あくまで俗説であるが、それを察知した紹巴は「せきとめて」と、中止させようとの意を含ませた句を詠じたとされることもある）江戸期の人々も浄瑠璃や歌舞伎の中などで、そのような解釈を常識として来た。四世鶴屋南北の「時今也桔梗旗挙（ときはいまなりききょうのはたあげ）」一八四八年作は外題でこの発句を活している。これ以前に近松半二等の「三日太平記（みっかたいへいき）」一七六七年作の中で光秀の口にするせりふにこの句が採り上げられている。その場面は、以下の通りである。

尾田春永（「小田」とも、以下役名）は天下平定を目指し、各方面へ武将を遣し、当人は中国の真柴久吉を助けようと、本能寺に宿泊していた。そこに勘気を蒙って遠ざけられていた武智光秀が、あえて目通りを願い出る。

光秀は、春永に武人の鑑となってほしいとして、劉備玄徳を例に挙げ直諫する。怒った春永の命で、森蘭丸が、鉄扇で光秀を打ち、要で額を割る。（眉間割り）

屈辱に耐えていた光秀は「最早これまで」と、謀反を決意しこの発句を呟く。時ならぬ陣太鼓等が打ち鳴らされ人々は狼唄する。小柄を抜いた光秀は「忠孝」と書かれた額を、それで打ち落し、春永に張本が自分であることを告げる。

近世までの人々は、この発句の重要性・意図を、例えば以上のように理解していた。すなわち、謀反の意を読みとっていた。

近代に至り、この理解に疑義が、桑田忠親氏を中心として、さしはさまれる。論点は二つある。その一は、本文の問題である。底本等は「連歌集」島津氏校注の解題にあるので参照してほしいが、この懐紙の原本はなく、写本の中で「天が下し・る」を「天が下な・る」とするものもある。後者ならば「世の中すべて五月雨の今にふさわしい光景」との従来の作法通りの自然詠となる。先述した紹巴に関する物語の中には、後に秀吉の追求を怖れた紹巴が書き改めたとするものまである。

その二は、仮に、光秀が決意を秘めたこの発句を詠じた時に、一座の者などの中に（連衆は光秀を含め九名、五名は連歌師。光秀の縁者は行澄（ゆきずみ）・光慶（みつよし）の二名）、光秀の意図を察して、信長方に通報するような者がいなかったであろうか、光秀は安心して心情を吐露出来たかという点である。

言われてみればその可能性もあって、通説を否定する考えの柱となっている。

以上のことは、光秀という謎に満ちた人物の魅力もあってか、多くの研究書・文芸書に採り上げられている。興味のある方は、サイト等で、詳細を調べてほしい。

今年でＮＨＫ大河ドラマは六十作目。この稿を記している時点で様々の困難に直面しているようである。筆者としては、第三作目「太閤記」の佐藤慶が良かったように、個人的には思っている。

（山形大学名誉教授）

最上義光歴史館サポーター
義光会だより
No.10
2020年3月

題字　齋藤蕉石

はじめに

平成から新元号、令和に改元され六四五年の大化から計二四八の元号である。この誠に慶賀の年に最上義光歴史館サポータークラブ義光会会長の職務を遂行させていただいたことは身に余る光栄に思うものであります。

さてそれでは、平成の終わりから令和初年の義光会サポータークラブの主な活動内容を紹介してみます。

感謝状と記念品

平成三十一年四月六日総会の席上最上義光歴史館サポーター満十年目の二期生九人に昨年の一期生に続き歴史館より感謝状と記念品として「虎賁郎将（最上義光公の官位の漢名）」の略称「虎将」の彫り駒（四寸）を授与され感謝表彰されました。

二期生は二〇〇九年（平成二十一年）に三〇人（この年は義光公と戦った直江兼続が主人公の大河ドラマ「天地人」もあって関心が高かったものとおもいます。）が養成講座を受講し二九人が歴史館サポーターとして登録されました。

令和二年三月現在八名ですがいずれも一騎当千でありこれまでの歴史館の数々の企画事業に又義光会の活動に多大な協力・支援をしていただきました。

平成最後の霞城観桜会

第二九回霞城観桜会が平成三十一年四月十三日～十四日の二日間行われました。

両日とも好天に恵まれまだ多くの桜は咲き始めたばかりでしたがたくさんの市民らが訪れる中、積極的に「最上義光武将隊」として自主参加し外国人観光客や家族連れの記念写真にも気軽に応じ賑やかに一役買うことができたものと思います。

桜・城址・甲冑姿の武将・日本刀などまさに日本の春であり、過ぎ去る平成最後の春でもありました。

現地研修会

現地研修会は平成二十三年度から会員の資質向上と親睦を図ることを目的に行っているものであります。令和元年度は庄内方面を企画し九月二日（天候小雨）に国宝羽黒山五重塔の内部（初重と二重）と羽黒山所大権現の秘仏の拝観、致道博物館と庄内藩校致道館、城輪柵跡、北舘神社を研修いたしました。

致道博物館では学芸員の方より古文書の読み方など丁寧に説明していただき、城輪柵跡では酒田市教育委員会の方から雨の中 古代の山形について 説明をしていただき深く感謝申し上げたいと思います。北舘神社においては最上義光公の家臣でもある初代の北楯大学利長公より一六代目になる北楯利久宮司より正式参拝と弥栄のお守り、そして貴重なお話もいただき最上義光公との強い関わりを感じとることができ現地でのよい研修となりました。

書面の都合上簡潔に紹介しましたが庄内方面は最上義光公に関係する歴史の宝庫であり義光会にとっては時を得てまた行く永久の研修場所でもあろうかと思います。

歴史館開館三〇周年記念を祝う

最上義光歴史館は平成元年十二月一日に山形市政施行一〇〇周年記念事業の一つとして開館致しました。令和元年七月に市政施行一三〇周年記念式典が開催されました。それに合わせ十二月二十日に片桐繁雄先生の講話後に先生を囲み忘年会を兼ねた昼食会と紅白饅頭にて細やかではありましたが最上義光歴史館開館三〇周年記念をお祝い致しました。

こども講座

平成二十二年 山形市立第一小学校、山形市立第四小学校の二校をモデル校として最初に出張こども講座を実施してから令和元年で満十年になります。

最初は二校 総児童数七七人でしたが令和初年の実施校は一四校総児童数八二三人でいずれも四年生に出張こども講座をし学習して頂きました。

これはいままでに講座担当をしていただいた先輩諸氏の熱意と創意工夫と努力の賜物でありその成果は確実に実を結んでいるものと思います。

来年度も義光公の業績と人物像を伝える事を主眼に講座担当者一同さらに研究をし取り組んでいきたいと意欲的であります。

おわりに

歴史館は山形市民の歴史文化の勉強の場所として、地域の歴史文化の発信の拠点としてたしかな存在感があります。

これからも五〇年、一〇〇年、二〇〇年と続いていくものと思います。私たちは市民ボランティアとして現在の山形の街並みの基礎を築いた最上義光公の業績と人物像を伝え最上義光歴史館の良き協力者としてまた山形の歴史文化の発信の司令塔として誇れるように研鑽をして行きたいものであります。

令和二年三月

（義光会第四代会長　齋藤耕一）

開館三〇周年記念事業
復元された最上義光の指揮棒

戦国武将・最上義光を象徴する数少ない遺品として、全国的にも大変珍しい鉄製の指揮棒が現存しています。

このたび、開館三〇周年記念事業の一環として、義光が所持していた当時の姿の指揮棒を復元製作しました。

最上家の伝承では、指揮棒には金象嵌で文字が刻まれていたと伝えられていますが、残念ながら現存する指揮棒は金が失われて「清和天皇末葉山形出羽守有髪僧義光」の一六文字の陰刻だけが残された状態です。

復元を担当したのは、山形市長谷堂在住で山形県指定無形文化財保持者の上林恒平刀匠です。材料や製作工程を吟味し金象嵌も再現して、できる限りオリジナルに忠実に復元しました。復元された指揮棒は常設展示されています。ぜひご来館のうえご一覧ください。

①復元準備1
陰刻文字の拓本を採る

②復元準備2
材料になる玉鋼

③玉鋼を熱して鍛錬の準備

④熱した玉鋼を鍛錬し、指揮棒の形に整える

⑤指揮棒の形に形成したものの表面に文字を彫り、金を埋め込む（金象嵌）作業

⑥金象嵌が施された指揮棒

⑦錆びつけ用の溶液を塗布して黒錆を発生させる作業

⑧⑨表面を磨いて金象嵌を出して完成

最上義光連歌の世界④

名子　喜久雄

83　あつさをも知らぬ垣べの岩ね水　了意
84　千尋の竹のなびくいく本　義光
85　末もはたさかえもて行くうぢならん　光清

文禄二年（一五九三）二月十三日
賦何人連歌　名残ノ表

文禄二年は、義光にとって、肥前名護屋に在陣中であることなど、俗事に煩わされる年であったと思われる。その中で忙中閑を得て、この連歌が張行されたか。この作品の完成までには、まだ不明な所がある。明治書院刊「連歌総目録」（平成十年）によれば、内閣文庫等に三本の存在が知られている。それらは義光の発句のみが記載されている。完本は、山形市史所収の本文のみであるが、これは、「連歌総目録」にもれている。

発句のみが何らかの事情で先に詠まれ、その後に改めて、義光や人々が付けたのであろうか。

さて、義光の本文は、「伊勢物語」に依拠したものである。それを理解するために前句（83）を検討したい。

83のキーワードは、「岩ね水」か。おそらく古今・賀　貞康のみこのをばの四十賀を大井にてしける日よめる　紀惟岳

750　亀の尾の山のいはねをとめておつる　たきの白玉千代の数かも

すなわち、83の句は単に、夏の暑さを忘れさせる水辺の夏の風情を詠んだ訳ではなく、その背景にある古今集の本歌の祝賀性をも感じとるべきなのである。一種の「家ぼめ」である。

義光の付句は凝ったものになっている。前句の暑さから、以下の「和漢朗詠集」の句を脳裏に浮かべる。

和漢朗詠集　松　源順

424　九夏三伏の暑月に　竹錯午の風を含む

暑い夏に風に吹かれる多くの竹を詠んでいる。このようにして、暑さに竹が連想される。それを「千尋の竹」としたのは、どのような理由があったのであろうか。ここで「伊勢物語」七十九段の理解が必要となる。

「伊勢物語」七十九段

むかし、氏のなかに親王生まれたまへり。御産屋に、人々歌よみけり。御祖父がたなりける翁のよめる

わが門に千ひろあるかげをうゑつれば　夏冬たれかかくれざるべき

これは貞数の親王、時の人中将の子となむ言ひける。兄の中納言行平のむすめの腹なりけり。

七十九段の和歌は「……かげ」であり、現在通行の本文はいずれもそうである。しかしながら「肖聞抄」などの古注には、

『千ひろある陰』とは仙家の竹なり。寿命を祈る心也

とあって、中世人にとってこの植物は、「仙家の竹」なのである。

つまり、単なる夏の涼しげな情景ではなくその家の将来を予祝している句となっている。これは、義光が、前句の背景の古今集歌を発想出来たこと、その賀意を継承し発展させたことを示している。

85の句も、義光が「伊勢物語」に立脚したことを感得している。親王を中心として、一族（「うぢ」）の発展栄華を願った句、賀意があふれた句になっている。義光も、84句に一族の発展の心をこめているのであろうか。

（山形大学名誉教授）

令和元年度事業

展示事業

○常設展示Ⅰ《4月3日－7月17日》
「鐵［kurogane］の美2019」～武士［mononofu］と日本刀～

○特別展《7月20日－9月8日》
「山形大学附属博物館・最上義光歴史館連携展『山形めめめ』～江戸のトレンドランキング～」

○常設展示Ⅱ《9月11日－12月15日》
「開館30周年記念　～最上家ゆかりの新収蔵品～」

○常設展示Ⅲ《12月18日－5月17日》
「最上義光～乾坤一擲の戦い～最上義光と長谷堂合戦～」

○開館30周年特別企画《12月18日－5月17日》
「復元!!　最上義光所用鉄製指揮棒」

普及啓発事業（主な事業）

○こども講座
「ヨシアキ☆すく～る!?」～山形の殿様、義光公を知ろう！～
実施校　14校／参加生徒数　823名
講　師　最上義光歴史館サポータークラブ義光会

・7月4日　山形市立第一小学校　四年生
・7月9日　山形市立村木沢小学校　四年生
・9月11日　山形市立大郷小学校　四年生
・9月26日　山形市立明治小学校　四年生
・9月27日　山形市立第七小学校　四年生
・11月8日　山形市立第二小学校　四年生
・11月12日　山形市立南山形小学校　四年生
・11月21日　山形市立東小学校　四年生
・11月22日　山形市立第八小学校　四年生
・11月27日　山形市立蔵王第三小学校　四年生
・11月28日　山形市立第四小学校　四年生
・12月5日　山形市立南小学校　四年生
・12月6日　山形市立滝山小学校　四年生
・1月15日　山形市立第九小学校　四年生

研究余滴⑲

「石鳥居」のこと

長谷勘三郎

山形周辺のあちこちに特徴のはっきりした古めかしい石鳥居があって、いろいろと話題になってきた。

むかし尾花沢野黒沢の諏訪神社前に、倒れた石鳥居があった。これを、山形師範学校の長井政太郎氏と、東根八幡宮の神官・三浦桂一氏のお二人が、礎石の柱穴まで土砂を掘り払ってみたところ、土の中から永楽通宝三枚を含む渡来銭が数枚発見されたという。これは鳥居建立の時代の手がかりになるはずと、更に慎重に作業を続けられたそうである。

ちょっと歴史を前に戻すと、日本では平家政権以後も、中国とはますます深い関わりが生まれ、鎌倉仏教など宗教の面においても重大な発展が見られるようになった。日本中世の発展を下支えしたのが、中国から輸入された銭貨だったわけで、室町時代以後では「永楽銭」がその代表的存在だったのである。山形地方での鎌倉・室町時代は、柏倉の寺山に大曽根荘の荘官安達氏によって、堂々たる山岳寺院が創建されていたし、近隣の長谷堂滝の山には、羽黒山を「御本社」と称する山岳修行者の拠点として、「滝山寺」が活気を呈していた。当然、これらの寺跡からは同時代の遺物と共に量は少ないが、渡来銭も出土している。近くの谷柏では、鎌倉時代に渡来したと考えられる唐、宋・元朝時代の渡来銭が数千枚掘り出されたこともある。

さて、室町幕府によって独占的に輸入された「永楽銭」は、幕府や有力大名たちの挺子いれもあって、流通期間が非常に長かったそうで、国内での流通はますます盛んになり、量的にも膨大なものになったらしい。山形地方では、江戸時代初期の貞享二年（一六八五）大石田村「道天」というところの畑から四〇貫目（約四〇〇〇枚）の永楽銭が掘り出されたという。この当時は永楽銭を示す「永」が銭を指す普通名詞にもなっていたそうである。足利・織豊・徳川と、時代は戦国から太平の時代にはいる。

安定的に動きはじめた幕府は、自国の銭は自国で鋳造すべきだとの方針を定め、寛永十三年（一六三六）以後は「寛永通宝」が各所で鋳造されるに至った。それが相当広まって、頃合を見計らったのであろう、寛文十年（一六七〇）には、渡来銭の通用を禁止するにいたった。もちろん、全国的に一気に実行されたわけでもないだろうと思われる。

芭蕉の句「この筋は銀も見知らず不自由さよ」という句は、こういう時代の通貨流通状況を実感させてくれる。

尾花沢近隣の野黒沢で永楽銭が発見されたということは、永楽銭が大量に流通していた時代があったと考えられるわけである。鳥居柱石の下にこの銭貨が置かれたかまたはたまたま土に紛れこんだか、とは考えてよかろう。

長井先生は、このことから、歴史・地理学者として、山形市元木・成沢の石鳥が平安時代のものという考えには否定的になられたようだ。

令和2年度事業

1. 展示事業

(1)企画展

「（仮称）刀装具の美」

実用的なだけでなく芸術性も追及された刀装具（鐔、小柄、笄、目貫等）の数々を公開し、発注主の武士の嗜好による斬新なデザインと極小の匠の技を紹介する。

(2)常設展示

最上義光を主とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながら一部コーナー展示を行います。

①「鐵[kurogane]の美2020」
～郷土の刀工・江戸三作ゆかりの刀匠たち～

②「（仮称）収蔵名品展　屏風絵」

③「（仮称）発掘された山形城」

※日程については最上義光歴史館にお問い合わせください。

2. 普及啓発事業

(1)歴史講座

①こども講座（小学校出張講座）

山形市内の小学校に出向いて最上義光を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心の育成を図ります。

(2)ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなって、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティーを創出します。（年1回サポーターを募集します）

・「義光塾」

・「現地研修会」

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

表紙の写真

指揮棒に金象嵌する作業

令和元年八月二十八日、山形市長谷堂にある上林恒平刀匠の仕事場「恒平鍛刀所」にうかがい、金象嵌の作業を見学しました。

指揮棒の形に形成した鉄の表面に鏨（たがね）で丁寧に文字を刻み、線引作業で細長くのばされた金を埋め込む作業が行われていました。

開館三〇周年記念事業の一環として、義光が所持していた当時の指揮棒の復元製作を企画しました。復元を担当したのは、山形県指定無形文化財保持者の上林恒平刀匠です。上林刀匠は何度も当館に足を運んで調査され、材料や製作工程を吟味してできる限りオリジナルに忠実に復元しました。※詳細は六ページ参照

ご利用について

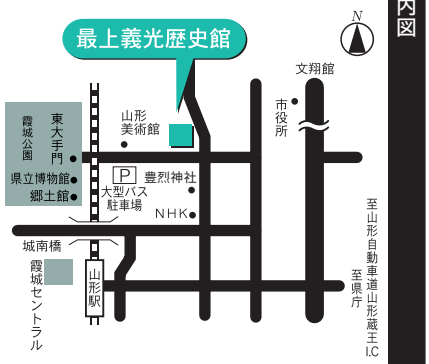
開館時間　午前9時から午後4時30分

入館料　無料

休館日　月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）
12月29日から1月3日

交通　JR山形駅より徒歩約15分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



令和2年3月発行
編集・発行　公益財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-0046
山形市大手町1-53
TEL 023-625-7101
FAX 023-625-7102
http://mogamiyoshiaki.jp
印刷　株式会社大風印刷